
『ユリシーズ』（9章）解説

樋口 日出雄

筆者は前稿（『ユリシーズ』（1～3）解説）において、克蘭リーという人物にはその背後に軍事的といおうか、少なくとも武張ったイメージが感じとられることを指摘した。前稿においては、その克蘭リーが出てくるひとつのシーケンスを提示しておきながら、その詳しい解釈については保留したままであった。本稿は、これらジョイスの残したシーケンスの分析により、ジョイスの話しのころがし方に迫ってみようというのが目論見である。

さっそく問題のシーケンスに番号を付けて考察してみよう。

- ① Where is your brother?
- ② Apothecaries' hall.
- ③ My whetstone.
- ④ Him, then Cranly, Mulligan: now these.
- ⑤ Speech, speech.
- ⑥ But act.
- ⑦ Act speech.
- ⑧ They mock to try you.
- ⑨ Act.
- ⑩ Be acted on.

筆者には、別稿(「アップダイクの迷宮世界」——『文学における迷宮』)においてこの①～⑩のシーケンスを考察したものがあがるが、本稿はこれとはすべての面において別の発想に立つものであることを付記する。さらに言えば、本稿は集英社刊の『ユリシーズ』(日本語訳：丸谷・高松・永川)とも別の発想に立つ。この三人訳では①の your brother を「スティープンのおとうと」と解する。

ここで、前稿でも紙片メモ的に使用したシナリオという手法を再現して、このシーケンスに応用してみよう。

たとえば——①～④については

① (手紙／電報配達人登場)

君の舎弟のひっ越し先はどこ？

②～④ (配達人の独白)

- ② (住所は) 薬剤師ホール
- ③ (気付は) おれの砥石掘出し跡
- ④ (名をよぶように) ヒム、クランリー、マリガン、こいつら

となろう。これについては、同じ9章でスティープンがマリガン宛に打った電報のことを伝える文句が参考にされて然るべきである。

Malachi Mulligan, the Ship, lower Abbey street.

①'

②'

③'

いまかりに①'～③'のように番号をふってみたが、これを③'～①'のように逆転したものが、もとの②～④に相当するのではないか。

すなわち

② Apothecaries' hall → lower Abbey street

③ My whetstone → the Ship

④ Him…these → Malachi Mulligan

④で Cranly、Mulligan と家名を並べる一方で、その前後に〈Him〉〈these〉という家名の無い代名詞を置く個所は、封書（手紙にせよ電報にせよ）を棺桶に見立てるなら、〈Him〉〈these〉という棺桶の合間に〈Cranly〉〈Mulligan〉という戸籍簿にいう死亡保証書が添えられているのである。

同じように⑤～⑦のシーケンスについてみると——

- ⑤（配達人が馬／馬車で立ち去る際に）Him、these について明かせ。
- ⑥ しかし本務は果たせ。
- ⑦ 本務を果たしつつ明かせ。

となろう。このあたりで手紙／電報配達人は馬上槍試合の参加者と同一視される。むしろ鉄仮面を冠った騎手にみる他人からは正体不明である特性は、手紙／電報配達人の本性でもあろう。手紙／電報配達人がその胸にネーム・プレートでも付けていれば、そのこと自体最近の現象というべきであり、それはプライベート空間への立入りを認められたいが故の便法であろう。ひと昔前までは配達人は世間の情報入手の使者として、匿名の存在として玄関先に現われたものである。こうして配達人と客との間には不即不離の関係が要求される。

〈Act speech〉—— 本務を果たしつつ明かせ —— は名を明かすにしても、周囲に疑心をうむに至るようなことの無きよう配慮するということであろう。

⑧に至って、配達人の敵が顔をみせる。受取人（they）が君（配達人）に向かってだめを出すせりふでなくてはならない。

—— ⑧ 面々は君の働きがいま一步だと勝手な熱を吹く。

⑨と⑩は、手紙 / 電報配達人が局に帰り着いてからの、世間の人々がひとやすみしている配達人にあびせる言葉である。

—— ⑨ 本務を果たせ。

—— ⑩ いま一步を補完せよ。

II

ここまできたからには、少し先を読む ——

⑪ I am tired of my voice, the voice of Esau.

⑫ My kingdom for a drink.

⑬ On.

(訳)

—— ⑪ もうやめだ、人間の声の使い手となるのは。兄の名を騙るエサウの声の。

—— ⑫ 今は酒をつき合ってくれるなら、王国と引き換えてもよい。

—— ⑬ 使い手さん、もっと声をきかせて。

背景は図書館内でありながら、ここで幅を利かせているのは、文書資料ならぬ人間の声なのである。しかしその人物にしても、「人間の声の使い手」となることへの不信感を言い募るのを止めることができない。

①～⑩のシークエンスだけでは、『ユリシーズ』の読者は手紙 / 電報を受け取った人物がいることを納得するには至らず、⑪をまって始めて誰かそれに相当する「人間の声」の不信者すなわち手紙 / 電報という文書愛好者がいることを知るのである。しかし⑪の後半においてすぐに、それがエサウという他人の名を騙るような人物が受けた可能性を読みとるところとなる。

—— ⑫「酒をくれたら、王国をくれてやる」

という一文は図書館内の会話とも思えないが、手紙 / 電報という一方の文脈においてとらえ直してみると、「署名、書名、分類記号」という図書館内の情報空間におけるネットワークは、脱構築の哲学者ジャック・デリダいわくの「快樂原則」と「郵便原則」との等置を示していることになる。

「王国」とは「郵便」を用いて快樂のもととなる「酒」という財を持ち運ぶなら、容易に取引の材料になるようなものでもあるからである。

III

作中で電報を打つのはスティーブンであり、それを受けとるのはマリガンである。本文中にも

Good hunting. Mulligan has my telegram.

(いい喰いつきだ。マリガンのやつめおれの電報を放すまいことか。)

とある。これに註をつけた John Barger は ——

—— Cranly again associated with Mulligan … but why hunting?
SD (Stephen Dedalus) must now begin hunting anew?

—— (ここで、克蘭リーはまたもやマリガンと関係をもつが、なぜ〈hunting (狩り)〉であろうか? SD はまたぞろ〈hunting〉を新たにはじめなくてはならないのか?)

と疑問を投げかけている。前稿でも指摘したように、克蘭リーに付きまとうのは〈hunting〉という点で一貫していた。したがって Barger が、さらに

Folly. Persist.

—— (ばかな真似を。そうやってもち続けるがよい。)

とあるのをうけて、

—— so was the telegram the folly, or is it this presentation?
Could he still be cooeeing himself, here in J E's (J. Eglinton)
office?

—— 電報は馬鹿まねだったのか？ はたまたこの意見発表が馬鹿まねであるのか？ JE のオフィスを借りてまで、hunting (狩り) のさげび声をたてているということがありえようか？

という意見を書きつけているのはどう考えるべきであろう。先のスティーブンのせりふ ——

A: Good hunting. Mulligan has my telegram.

B: Folly. Persist.

と他方でマリガンがスティーブンの電報を目して毒づくせりふ ——

C: (電文を全部読みあげたのち) ——

Have you drunk the four quid? The aunt is going to call on your unsubstantial father. Telegram!

—— あいつは四人分の飲み代を噛みタバコに流用したのか？ そんな呑気なとうさんのところへは律儀なおばさんをさし向けるぞ。しかも至急電で。

とをくらべると、A、Bの直情的なスティーブンのせりふに対して、Cのマリガンのは、少し余裕があり、飲食の拠点で人を馬鹿にする野暮を働いた者へ、和風にいえば神社に付属する神の使い、すなわち諸種の動物を遣わしめる行為が見てとれる。〈aunt〉を「呑気なとうさん」別名「神の宮」に遣わすとはそのことであろう。アイルランドではダナ (Dana) という地母神が人間を織りあげるという伝承があり、機織り女 (aunt) をその Dana のもとに遣わすことも考えられる。

スティーブンはズボンにせよ、ブーツにせよマリガンの所有物を流用させてもらっている。それを〈宮廷の伊達者の鎧 / 郵便物〉 (mail of court buck) という口ぶりにも機織り / 神の宮のネットワークが感じられる。つまり、Barger が疑問とするように、スティーブンが再び〈hunting〉をはじめの訳ではなく、むしろ彼はマリガンの遣わす動物的存在によって〈hunting〉の対象となってゆく運命にあるといえるのである。

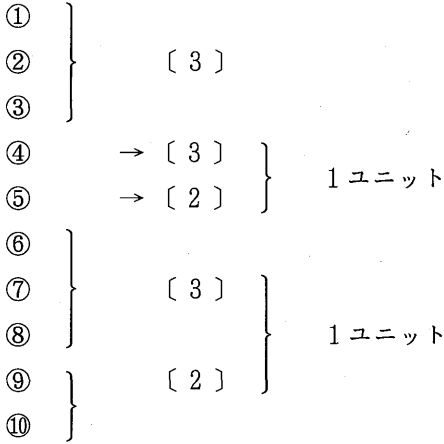
IV

HJS (Hypermedia Joyce Studies) に登録された論文、HCE and Jarl Van Hootheer on the Piss with the Porter の筆者 Alan Roughley によれば——シェイクスピアの劇『マクベス』の門番がノック音をカウントするには、それなりの由来があるということである。ノックの音の数は

3 / 2 / 3 / 2

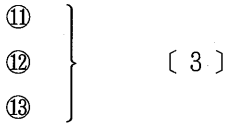
とカウントされ、3回という頻度は一回分の呪文 (a charm) に相当するとされる。これを、この論文の冒頭で考察したシークエンスに応用すると、その中にある動詞〈act〉は〈act like a charm〉という意義をもち、「(薬や治療などが) 魔法のようによくきく」という意味になる。

①～⑩を3 / 2を1ユニットとして表にしてみると下記のようなになる。



これを見ると、とくに最後尾の1ユニットの先頭に〈act〉という言葉がおかれているのは特徴的である。

⑪～⑬をこれに続けると――



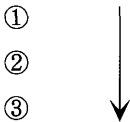
――となる。

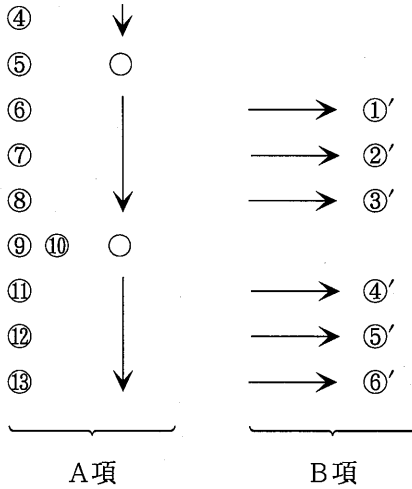
3 / 2 というユニットを

3 = 3 tries (3度魔術をかける)

2 = magic opening (魔術がとける)

と考えたうえで、[3] を棒線、[2] を○印で表記してみると――





棒線 (→) の部分は、このエピソードのタイトルともなっている女の怪物スキュラ (Scylla) の謎かけであるかもしれない。

B項に掲げた、たとえば

⑥ → ①' という関係は、

Act → I am tired of my voice. …

この (→) をはさんだ両側に平行な関係があることを示す。この伝で⑥以下の平行関係を訳出すると――

―― ①' = ⑥ 「プロ級にやって」 → ④' 「そのせいでもう声も出ない」

―― ②' = ⑦ 「プロ級に二の句 → ⑤' 「とにかく酒が一番、
をついで」 この国はくれてやる」

―― ③' = ⑧ 「謎かけのため勝手 → ⑥' 「どんどん通行せよ」
に熱を吹くものだーれ」

となり、⑥～⑧が謎をかける側、⑪～⑬が謎に答える側(酔った門番?)となろう。

V

John Bargerの資料(Homeric correspondences in James Joyce's *Ulysses*)によると、この第9エピソードはもともと第1エピソードの一部として目論見れたものとされ、三幕もの(三幕風俗もの?)として決着をみたのは第9エピソードが四幕の目論見からひとつだけ脱けものにされた結果だという。

Entr'acte.

A ribald face, sullen as a dean's, Back Mulligan came forwards then blithe in motley, towards the greeting of their smiles. My telegram.

— You were speaking of the gaseous vertebrate, if I mistake not? He asked of Stephen.

この第9エピソードでのマリガンの登場についてBargerは「マリガンのユーモアは言葉を濁している。電報は彼をして、しんから頭に来さしめたか」としている。

〈ribald face ズタボロみたいな顔〉はマリガンの酒にありつけなかったが故の仏頂面を表わし、〈deen's face 学監面〉はその電報を証拠の品として、不良学生の前につきつけている学生部長の顔である。

学生部長の方は、のちに自作の劇を披露するに及び、俳優陣に配するに医学生二人を以ってするところにつながることになる。仏頂面の方は自ら筆をとったその外題

——[ⓐ] Everyman His own Wife

—— 男はつらいよ（男の器量は帰するところその女にある）

につながるものであろう。

これも英国流ことわざ

—— Every bullet has its own billet

（鉄砲玉も帰するところあり）

の応用であろうが、副タイトルに

——[ⓐ]A Honeymoon in the Hand

（新婚旅行の旅路にある一組）

とあるのは、そのまた応用というべきであろう。いずれにしても、男の仏頂面が売り物であることは動かない。

一言でいってみれば、第9エピソードの人物たちは仏頂面でハンティングをする人（ハンター）ではないのか。手紙／電報をめぐる①～⑩のシーケンスにおいて [3 / 2] のユニットを組んでいる要素も、マリガンの自作の劇をめぐる——

① Everyman His own Wife

ⓐ A Honeymoon in the Hand

ⓐ (a national immorality in three orgasms)

ⓑ Ballocky

ⓑ Mulligan

[①ⓐⓐ : 3] [ⓑⓑ : 2]

このように展開してみると、ⓐの部分について——

④ 国立風俗劇 (三交代制)

という訳出が可能となろう。

第9エピソードの中段でマリガンは(明らかに『ハムレット』を眼中において)男ながらも出産のシーンを演じてみせる。学生監としての顔もみせる彼としては、山出しの野暮な格好で(彼はパナマ帽姿)、死生を賭す出産を演じることで「自然は完成を嫌う」というテーゼを学生の前で実現させたかったのであろう。

スティーブンは「宮廷の伊達男」の〈mail鎧 / 郵便物〉を借りて、学生 / 医学生としての精いっぱい弁明をする。

—— 人生は多くの日々だ。この日もいずれ終わる。

(このズタボロのブーツを見よ、ズボンを見よ)

仏頂面の独身男どもは、マリガンによって二人の医学生が俳優陣の一角に座を占めていた事実を忘れてはならない。マリガン流の言動は新婚旅行から実家に帰り着いてから獲得するものであって——「鉄砲玉も帰するところあり」「男の器量も帰するところその女だ」とは、せいぜい好意的にみても、仏頂面の独身男 / 学生たちの強がりにすぎない。

電報 / mail (鎧 / 郵便物) / delivery (配達 / 出産) と考えれば、スティーブンはマリガンを目して言う ——

Good hunting. He has my telegram.

(いい喰いつきだ。やつはおれの子を放すまいことか。)

とはこの第9エピソード全体を覆う結句となりおおせたようである。